



▲天間から見た富士山のふったて雲
▼桑崎浅間神社のシイ・タブノキ林



富士川河口は鳥たちの楽園

富士市域の自然つてどんなかな!

自然調査研究会に委託して十年がかりで調査

人間が生きていくための基盤である自然……この自然が

いま地球上から少しずつなくなっているといわれています。

市は、富士市域自然調査研究会に委託して、この自然が富士市域ではどうなっているのかを十年がかりで調査してきました。

調査によると、富士市は、富士山、愛鷹山と自然に恵まれているとはいっても、住宅地域周辺はごく小さな範囲でしか自然が残っていない、と報告されています。

私たちは、残された貴重な自然を保護し、次代に引き継いでいかなければなりません。

気候

富士市域は冬暖かく

夏涼しい

四部門別に詳しく調査

富士市域の気候は、夏は高温多湿の南東風が太平洋側から吹き、冬は寒冷で乾燥した北西風が吹く

富士市域の気候は、夏は高温多湿の南東風が太平洋側から吹き、冬は寒冷で乾燥した北西風が吹く

物、動物の四部門に分けて詳しく行われました。

地質・地形部門は、富士愛鷹両火山の基盤を中心に地質・地形や富士市域全体の地形、そして富士市及びその周辺地域のローム層についても調査しました。中でも愛鷹火山については詳細なルートマップもつくりました。

気象は十年間の気温、降水量、

風などを観測し、まとめました。

植物は種子植物、シダ類、水生植物及び帰化植物などの植生調査をしました。

動物についても鳥類、哺乳類を中心いて七分類の調査をしましたが、

今回はそれぞれ詳しく調査した中から、気象、植物、鳥類に的をしおって概要を掲載します。

雨量は年によって大差がありますが、年間の総降水量の平均値は二〇〇〇ミリから二一〇〇ミリです。

富士山・愛鷹山の両山麓の多い富士市域は、一般に標高が増すにつれ降水量もふえる傾向にあります。それが集中的になつた場合、家屋の浸水、川のはんらんによる田畠の被害などが発生しています。それが集中的になつた場合、

日が続きます。
市域の最寒月は一月です。(丸火は二月)

日本海側の富山、金沢などの月平均気温の平年値と比べると、標高五〇〇メートルの丸火さえ一度C以上も高い。それに対し八月はやや高いが、ほぼ同じぐらいの気温です。富士市域は、冬暖かく夏涼しいといえます。

特に著しいのが丸火で、標高のほぼ等しい飯田市、高山市などと

平年値で比べると一月では三度Cから六度Cも高く、八月では逆に一度Cから二度C低くなっています。

富士山・愛鷹山の両山麓の多い富士市域は、一般に標高が増すにつれ降水量もふえる傾向にあります。それが集中的になつた場合、



▲盛り上がった笠雲



▲アシタカツツジ



▲浮島ヶ原のダイサギ

植物

今回の調査で確認した種子植物は、約一五〇〇種でした。これに他の文献に記載されている種類を加えると、一八〇〇種を超えるものと推定されます。静岡県の種子植物数は約三六〇〇種ですから、その二分の一が富士市に分布していることになります。

海岸・低湿地から愛鷹山・富士山までを持つ富士市は、植物相も豊かであるといえます。

照葉樹林

低地は工場、市街地であるため照葉樹林は失われ、岩松にある水神社にその面影を残しています。

ここは、タブノキ、スダジイの照葉樹に混じってハリギリ、イヌシデなどの夏緑広葉樹もあります。低木層にはアラカシ、ヒサカキ、ヤブツバキが生育しています。

そのほか、桑崎、今宮の浅間神社、鶴無ヶ渕神明宮、実相寺、永

源寺の裏山などに、小規模ながら良好な照葉樹林が残っています。

スダジイ二次林は、丘陵地の排水のよい斜面や沢沿いの斜面に残っていて、岩本山の南西面と愛鷹山の須津川に見られます。

亜高山性針葉樹林と高 山帶

富士山の亜高山性針葉樹林帶は、標高約一八〇〇メートル以上です。

トウヒ、コメツガなどの常緑針葉樹に、落葉針葉樹カラマツが混生し、さらに夏緑広葉樹のダケカンバ、ナナカマドが入っています。

二五〇〇メートル以上の高山帯は、いわゆる火山荒原の不安定な砂れき地にオンタテなどが島状に群落をつくり、続いてイワスゲ、コタヌキラン、フジハタザオなどが生育しています。さらに安定した所ではカラマツ、ダケカンバなどの風衝性の低木が見られます。

しかし、富士山は、他の高山に比べて高山植物が少ないことがわかりました。

めずらしい植物

富士市域の分布上まれな植物、絶滅のおそれのある植物を挙げる

とかなりの種類になります。特にラン科植物はハコネランを初め、フジチドリ、キソエビネ、ウチヨウランなど、一般に産量が少なく、開発や近年の野草ブームもあって絶滅のおそれが高いので嚴重な保護対策が必要です。

特に保護したい植物群落

・浮島ヶ原の湿原植物

・照葉樹の自然林として市街地近くに残されている社寺林

・大渕のアシタカツツジ群落

・岩本山のアキザキヤツシロラン群生地

・岩本山のモチツツジ群落

・鷹岡のカタクリ群生地

・須津川の照葉樹の二次林

・市街地近くにある農用二次林
・自然度も高い丸火自然公園のクリ、コナラ二次林

鳥類

鳥類

富士川河口にはたくさんの鳥が

(一) 富士山地域
調査地域は、富士山、丸火自然公園、愛鷹山南麓、富士川河口及び浮島ヶ原の五地域で行いました。

(二) 丸火自然公園地域

ここでは、高山に住む鳥や冬鳥がよく見かけられる中で、マヒワの群、アトリ、旅鳥のノゴマなどの珍鳥も見られました。

夏鳥で以前は南麓全域でよく見られたサンコウチヨウが、近年は、毎年確実に見れるのは丸火自然公園のみになりました。

(三) 愛鷹山南麓地域

愛鷹山南麓についても、須津川流域の調査のみに終わってしまいましたが、そこで観察した野鳥は、十九科三六種で、トビ、ヤマドリ、

キジ、キセキレイ、ウグイス、メジロなどでした。

四 富士川河口地域

富士川河口で観測した野鳥は、三四科一六六種でした。一九八四年の状況を生態別と種類別に区分すると、最も多いのが冬鳥で五六種、次が旅鳥で四七種でした。

冬鳥五〇〇〇羽のうち、ガン、カモ科種類でカルガモが最も多く、二〇二〇羽、次がコガモの一三九羽でした。

旅鳥四七種のうち、三〇種類をシギ、チドリ科で占めています。

この特徴は、河口と海が接する地点に河口をふさぐ形に砂れきの堤防が横に長く伸びて、海から寄せる波が河口に入らず、内側に広い静かな水面ができるいます。

水面には、ウミウ・カモ・カモメ類が羽を休めたりえさをとったりしています。また中州には雑草が茂り・カワラヒワ・スズメ・ホオジロのえさ場にもなり、これを捕食するチュウヒ、ハヤブサも姿を見せます。

(五) 浮島ヶ原地域

観察した野鳥は三二科、一一六種でした。葦の原が次第に消えて田畠に変わるとオオヨシキリ、ヨシキリなどは他に移り冬から春までコミニズク、ノスリなどのタカの仲間が見られました。また九月から十一月上旬の狩猟解禁前は、田にタシギ、コガモ、カルガモなどが見られますが、狩猟解禁と同時に翌年春まで水鳥の姿は見ることはできない地域です。